

## 『ヨブの迎えたアドベント』 ヨブ記1章 1-22、23-27 節 2018.12.16 アドベント第三主日礼拝 結城晋次師説教より

『私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。』 ヨブ記19章25節  
旧約聖書のヨブほど、不条理で不可解な人生を送った人は珍しいが、その人生の真意を知る人はどれほどいるだろうか？ヤコブ 5:11 によれば、学ぶべきは「ヨブの忍耐」だが、ここでは「神義論(御前に正しい人が何故苦しむのか)」が問われている。

◆「ある日」、神が絶大な信頼を寄せるヨブをサタンが訴える。「ヨブが神を畏れ敬うのは、祝福が与えられ、幸せが守られているからだ」と。悪魔の確信は「御利益なしに人は神を信じない」というもの(ヨブ 1:9)。神の許可を得て、悪魔はヨブから、財産・10人の愛する子・健康・妻の信頼・友の尊敬・社会的立場・神の慈しみ深さへの信頼感…を奪った。しかしそこまで追い詰められ苦しめられても、ヨブは愚痴をこぼさず、罪を犯さなかった。人は何の益なく神を信じられるものなのか。

◆私たちの人生は、詩篇によれば「飛び去る」ものであり、一寸先は闇(事故、激甚災害、突然の病…)。そんな人生を歩みつつ、慈しみ深い神をどこまでも信じ、誠実に仕えられるのか。「苦しみに会ったことは私にとって良いことでした(詩編119:71)」と、厳しい試練に会った信仰者の力強い証が確かにある。主を信じつつも孤独な最期を迎えたある姉妹の愛唱讃美歌(361番)は、「生くるうれし、死ぬるもよし、主にあるわが身の幸はひとし」だった。

◆試練や苦難に生きる私たちを、神はただ腕組みして座しておられる方ではない！ステパノ殉教の時、御座から立ち上がられた神は、ヨブがサタンの試練に持ち堪えられるのかを終始御覧になられたはず。

◆ヨブは、ある時を境に、あれこれ言うのを止めて、「私を贖う方は生きておられる。私の目は神を見る」と告げる(19:23～)との告白に至る。闇の中、どこにも神が見えず、自分も見失うような人生をもがきつつ彼は、「私は神を仰ぎ見る」との信仰に導かれ、最後の最後に直接神からの語りかけを受けて悔い改めた(42:5-6)。「悟った」のではなく「悟らされた」！「ヨブ」とは「父はどこに」の意。キリスト信仰とは漠然と神がおられると信じるのではなく、どんなに惨めでも、この私と共におられる神を信じること。人は「絶望の名人」だが、「インマヌエル(神は私たちと共に！)」を実現されたイエスを心静かに迎える時、父なる神の臨在を知る。これがクリスマスの喜びの全て。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい(ヘブル 12:2)」！